

## センチメンタリズム・アメリカ型

— ジャック・ロンドンの場合 —

大 井 浩 二

しばらく前に、アメリカ作家ハロルド・フレデリックとシンクレア・ルイスの作品を材料に、リアリズム小説のセンチメンタルな終わり方という問題を検討したことがあったが<sup>(1)</sup>、ここでは同じような立場からジャック・ロンドン(二八七六—一九一六)の作品について考えてみたい。果たして、ロンドンの場合にもまた、アメリカ的センチメンタルイズムの甘い香りを嗅ぎ付けることができるだろうか、などと言いつせば、タフガイ作家とも呼ぶべきロンドンとセンチメンタリズムとの結び付きを意外に思う読者も多いにちがいない。たしかに、ロンドン是一般には骨太の自然主義作家として知られ、例えば代表作『荒野の呼び声』(一九〇三)などから判断する限り、弱肉強食の掟の支配する荒々しい自然の世界を扱った彼の小説には、センチメンタリズムの入り込む余地など全くないように見えるかもしれない。だが、かりにロンドンのようなアメリカ作家のなかにもまた、牧歌的な風景に対する愛着を読み取ることができるとすれば、都市化した二十世紀初頭のアメリカ社会に根深く残っている、美德の共和国への断ち難い憧憬を浮き彫りにすることができるのではないだろうか。

その点を明らかにするために、ロンドンの後期の主要な長編小説の一つである『バーニング・デイライト』(一九一〇)という作品<sup>(2)</sup>を取り上げてみよう。この小説の第一部はロンドンの愛読者にはお馴染みの北なる大地ノースラ

ンドが舞台になつていて、この最後のフロンティアとしての「白色の荒野」に一八八三年にやって来てからずっと、十二年間にわたつて金鉱を探し続けているエラム・ハーニツシュという男が登場するが、彼は朝早くから「日光が燃えている」と叫んで仲間を叩き起こす習慣のために、バーニング・デイトライトという渾名で知られている。赤銅色の肌、鋭い黒い眼、薄い唇といった具合に、いかにも精悍で、敏捷な運動神経を備えた彼の特徴は、他の連中とちがつて、「ほとんど完璧な頭脳と筋肉の整合」を備えている点であつた。だが、読者としては、この主人公が何よりもまず、苛酷なフロンティアの状況のなかに投げ込まれたパイオニアであつたという事実注目しなければならぬ。アイオワ州の農場に生まれ、父親とともに移住したオレゴン州の炭鉱地帯で少年時代を過ごした後、十八歳のときに極北の地にやってきた彼が典型的なパイオニアであつた点を『バーニング・デイトライト』の語り手は強調して、「この遠い北極の荒野では、すべての男たちがパイオニアであつたが、そのパイオニアたちのなかで彼は最も古いパイオニアの一人に数え上げられていた」と説明している。

こうした「機知と技術と体力」に恵まれたパイオニアとしての彼を絶えず突き動かしていたのは、男性的としか形容できないような逞しい生命力であつた。「彼の人生のプロセスの奥深い所で、生命そのものが、それ自身の素晴らしさに関するセイレーンの歌を歌つていた」という説明に続けて、「それは健康で力強く、脆さや衰えを知らない生命の衝動であつた」とも書かれている。エラム・ハーニツシュが肉体面でも精神面でもこの上なく男性的な人物であつたことは、「バーニング・デイトライト」という彼のニックネームからだけでなく、そのエラム (Eram) という名前が“male”のアナグラムであるという事実<sup>(8)</sup>からも容易に想像することができるにちがいない。西なるフロンティアがアメリカ共和国の例外性を保証するアメリカ独自の風景であつたとすれば、そこに君臨する『バーニング・デイトライト』の主人公に備わるさまざまな男性的な美德は、その共和国の存続に不可欠な美德であつた、と言いつつよいだろう。この人物を「驚くべき体力と、荒野を征服するための真の勇氣とを合わせ持ったノースランドのレザーースト

ツキング」<sup>(4)</sup>と呼んでいる批評家がいるとしても不思議ではあるまい。

さらに、エラム・ハーニツシュがフロンティアに生きるに相応しい、男性的な生命力と美德に溢れた人物であったことは、彼の行動領域から女性が一切締め出されているという事実からも窺い知ることができのではないか。男のなかの男とも呼ぶべき彼のことを慕っていた女性が、絶望して自殺するという事件まで起こるけれども、ハーニツシュは女性の「エプロンの紐」で縛られることを頑なに拒絶し続ける。恋愛は「寒気や飢饉」よりもずっと恐ろしい、と信じて疑わない彼は、「天然痘から逃げてきたと同じように、これまでずっと恋愛から逃げてきた」と語り手は説明している。「女性は恐ろしい生き物であったし、恋愛の黴菌が女性の周囲にはとりわけ豊富であった」と彼が考えて、「その結果、彼は女性に会う可能性のある家への招待のほとんどを断った」などという説明は、いささか大袈裟で、滑稽でさえあるとしても、共和主義的イデオロギーにおいて、女性のセクシュアリティは男性の美德を脅かす危険な要素に他ならなかったことを、この小説の読者は理解しなければならぬ<sup>(5)</sup>。ハーニツシュの一見異常な女性恐怖症は、彼が美德の共和国に相応しいパイオニア的男性であったことを何よりも雄弁に証明しているのである。

『バーニング・デライト』第一部の結末で、エラム・ハーニツシュは、十二年間に及ぶ失敗の連続の後、ようやく金鉱を掘り当て、巨万の富を手に入れる。だが、艱難辛苦の末に一獲千金の夢を実現した彼を、現代のヒーローとして描くことはジャック・ロンドンの目的ではなかった。これまでの部分は、この小説の準備段階とも呼ぶべきであって、ロンドンの主たる関心は見事に成功を収めた主人公のその後を追いかけることに向けられている。というのも、この後の小説の展開は、それまで開拓者として活躍していた主人公が、その成功を契機として、一人の実業家に変貌したことを物語っているが、このエラム・ハーニツシュに起こった個人的な変身は、アメリカ合衆国そのものが十九世紀から二十世紀にかけて経験した歴史的な変化の縮図となっている、と考えることができる。そして、この事實はまた、それまでの彼の本拠地がノースランドの地理的フロンティアであったとすれば、これからの彼に相応しい

場所が、その対極にある産業的、都市的フロンティアとならざるを得ないことを暗示している。したがって、第二部の冒頭で、一千二百万ドルの資金を手にした主人公がサンフランシスコという都市に移り住むようになるというは、極めて自然な設定であったと言わねばなるまい。

サンフランシスコへ乗り込んだエラム・ハーニツシユは、ノースランドの苛酷な自然のなかにいた時と同じような態度で行動する。金鉱探しの生活を止めて、聖フランシス・ホテルに落ち着いても、「彼を当惑させるものは何もなかったし、彼の周囲の誇示や文化や権力に圧倒されることもなかった」と書かれている。なるほど、大都會の住人となった彼が「文明人」のマナーを見習うようになり、英語の個人レッスンを受けたことは否定できないとしても、「彼はずっと彼自身であり続け、過度に恭しい態度を取ったり保守的になったりすることもなかった」と語り手は説明しているが、それはサンフランシスコが「もう一つの種類の荒野」であったからに他ならない。このことは彼が長年暮らしていたノースランドの荒野がフロンティアであったと同じように、「もう一つの種類の荒野」としてのサンフランシスコもまた、もう一つのフロンティアであったことを意味している。かつてのパイオニア的ヒーローとしての彼は、その新しい都市的フロンティアで何の違和感を覚えることもなく、実業家としての手腕を発揮することができた。事実、ハーニツシユは彼の財産を騙し取ろうとした実業家たちを相手に一步も退くことなく、四十四口径のコルト拳銃を片手に立ち向かっているし、競争相手の買収やオークランド市の開発事業などにも輝かしい成功を収めた結果、最終的には三千万ドルの財産を築き上げてもある。地理的フロンティアでの成功者は、同時にまた都市的フロンティアでの成功者でもあったのだ。

だが、サンフランシスコという新しいフロンティアは、極めて破壊的で非人間的な力を持った「荒野」であることが次第に明らかになってくる。実業家としての彼が高度に文明化された資本主義社会で「激しく野蛮なゲーム」を繰り返しているうちに、「彼のゆつたりとした西部訛りと同じように、彼の生得の愛想のよさがいつの間にか消えう

せてしまった」と書かれ、「彼のとてつもないヴァイタリテイはそのままであったが、それは人間を押し潰し、人間を征服する者という新しい様相を帯びたヴァイタリテイであった」ことを読者は教えられる。彼は立派な衣服を身につけ、上品な英語を話し、生活水準を引き上げることができたが、「デイライトが文明世界へやってきたことは、彼を向上させることはなかった」という語り手の言葉が物語っているように、「生得の愛想のよさ」を失った彼は「シニカルで辛辣で残忍な」人物に変貌する。さらに搾取する人間を疑い、搾取される人間を軽蔑するようになった結果、自分だけしか信じられなくなったハーニッシュについて、「彼にはエゴという聖堂で参拝する以外に何も残されていないかった」と説明されているのである。

こうした彼の内なる変質は、彼の「肉体的な墮落」という外的な変容によって裏付けられている。運動不足のために筋肉はたるみ、精悍な顔貌も消えてしまつて、「極地からやつて来た鋼鉄の筋肉の持ち主」の面影は見る影もなくなっている。ふつくらとした頬、目の下の膨らみ、二重顎の皺といったさまざまの徴候は、「極度の艱難と辛苦から生まれた古くからの禁欲の効果が消え失せた」ことを物語っている。こうした彼の変化には「彼が生きている人生の汚辱」とともに「この男の放縦と無情と残忍」が露呈している、という説明を読めば、ハーニッシュがかつてパイオニアとして身につけていた美德が都市生活のプロセスにおいて霧消してしまつたことを認めざるを得ないだろう。元来「自然人」であつた彼がサンフランシスコという都会で暮らしているうちに、「不自然な都市の生活と息詰まるギャンブル的操作の緊張感」から足繁く酒場に通うようになり、今ではアルコール中毒の症状さえも示すようになっていく。「このビジネスという病気が四六時中あなたを蝕み、台なしにしてしまつだろう」と作中人物の一人はハーニッシュに警告しているが、ドルの支配する都市的フロンティアにおいては、「ノースランドのレザーストックキング」の生き延びる余地など何処にも残されていないことを、読者としても実感させられるにちがいない。

さらに、ノースランド時代のハーニッシュがそうであつたように、サンフランシスコにおける彼もまた、女性のセ

クシユアリティに対して異常な拒絶反応を示し続ける。実業家としての彼の前に有能で魅力的な女性速記者デイド・メイソンが登場しても、彼は積極的な行動に移ることができない。彼女に対して強い関心を抱きながら、昔ながらの「小心」を払いのけることができず、「エプロンの紐という亡霊」に悩まされ続ける彼の姿が作中の至る所に描き込まれている。生まれてからこの方、ずっと女性から逃げて来た彼の恋愛恐怖症がここでもぶり返してきて、「過去において彼が知っていた悲惨な男女の恋愛沙汰を思い出した」だけでなく、彼はまたしても「恋愛の黴菌」に取り付かれるのではないかと、という危惧を抱くことになってしまう。こうして彼は、デイド・メイソンの背後に「神秘的で不可解な女性とセックス」が存在していることを絶えず意識させられ、彼女の謎めいた行動のなかに「セックスの靡げな奥深さを見て取り、その魅力を認め、それを理解できないものとして受け入れた」とも書かれている。彼が恋愛を天然痘と同一視していたことは、すでに触れておいたが、新しいアメリカ的風景としての都市には「ビジネスという病気」だけではなく、理性では判断できない女性のセクシユアリティという「黴菌」もまた巣くっていて、「鋼鉄の筋肉の持ち主」の精神と肉体を蝕もうとしていることが明らかになってくるのである。

小説『バーニング・デイルイト』をここまで読み進めてきた読者は、新しいフロンティアとしての都市には混沌と資本主義と女性のセクシユアリティが支配するばかりであつて、そこではアメリカ共和主義を支えるパイオニア的美徳は押し潰される他はない、という自然主義作家ジャック・ロンドンのメッセージを聞き付けることになるだろう。エラム・ハーニツシユによつて象徴される男性的な「美德」とデイド・メイソンによつて象徴される女性的な「運命」の対立という、『セアロン・ウエアの墮落』や『アロウスミス』にも見られた共和主義的図式をそこに読み取るうとする読者がいるとしてもおかしくない。だが、主人公ハーニツシユが「二十世紀の超人」とさえ呼ばれていたにもかかわらず、やがてデイド・メイソンと恋に落ちて、「恋愛の黴菌」や「ビジネスという病氣」に侵された揚げ句、実にあつけなく人間失格という悲劇的結末を迎えるに至る、という決定論的な展開を予測して、たとえばロンド

ン自身の『海の狼』（一九〇四）のラーセン船長やフランク・ノリスの『マクティグ』（一八九九）の主人公のような並ぶ者なき体力の持ち主がなすすべもなく破滅する様子を思い浮かべた読者は完全に期待を裏切られてしまうだけだろう<sup>⑥</sup>。『バーニング・デイライト』には超人的ヒーローが唐突に無力化するなどといった自然主義作家の常套的なアイロニーは一切見当たらない。そこにはただセンチメンタリズムの色濃い影が漂っているばかりなのだ。

というのも、実業家としての生活に疲れたハーニッシュは都市から脱出したい、という願望を抱き始める。ある週末、彼は気分転換のために「月の谷」と呼ばれるソノマ溪谷へ遠乗りに出掛けるが、慌ただしい日常生活のなかですっかり忘れていた自然の風景を目の当たりにしたとき、「陽光に彩られた初夏の乾いた空気は、彼にとつてはワインであった」。ユリの花の咲き乱れた森は「大聖堂の身廊」に譬えられ、周りの景色のあまりの美しさに打たれた彼は、「かすかに宗教的な気分」に満たされて、帽子を取った、とさえ説明されている。その後にくく「ここには軽蔑や不善の余地はなかった。清潔で新鮮で美しかった——彼が尊敬できる何かだった。それは教会のようだった。雰囲気は聖なる静穏のそれだった」といった描写に見られる宗教的なイメージは、俗なる都市と聖なる田園のコントラストを際立たせている。こうした俗塵を遠く離れた牧歌的な場所で、ハーニッシュの抱いた気持ちちが「浄化と高揚のそれであった」とすれば、彼が「沐浴の一種」を経験しているような思いに捕らわれ、「都市生活の汚れた水たまりを満たしている不潔や卑劣や悪徳のすべて」を一時的に忘れることになったとしても不思議はあるまい。

こうして、いわば心身を清められた状態でサンフランシスコの生活に戻ってきたエラム・ハーニッシュは、「都市で墮落した彼の肉体と頭脳のなかにしみ込んでくる自然の強い魅力」に取り憑かれ、ついに事業や財産の一切を投げ捨てて、恋人デイド・メイソンとともに「月の谷」に引きこもり、そこで新しいアダムとイヴのような生活を始めることを決意する。この都市から田園への移行が精神的にも肉体的にも疲れ果てた主人公の死と再生を意味していることは言うまでもない。「都市の実業家であったバーニング・デイライトは飼育農場で急死して、アラスカからやって

来た弟のデイライトに取って代わられた」という説明は、エラム・ハーニツシュがアラスカからサンフランシスコへ乗り込んできた当時の「鋼鉄の筋肉の持ち主」としてのバイオニアに生まれ変わったことを物語っている。

この新天地で実業家から農民に変身したハーニツシュは、ここでの「新しいゲーム」が「清潔な力と生活」を可能にするのに反して、都会での「もう一つのゲーム」は「腐敗と死」と深く関わっていたことに気づいているが、「月の谷」で牧歌的な農民生活を始めることによって、彼はトマス・ジェファソンの理念に立ち返ることを目指している、と考えられるのではないか。「どの国家においても農民以外の市民階級の総計と農民の総計との比率は、その国の不健全な部分と健全な部分との比率なのであり、またそれは、その国の腐敗の程度を十分に測りうる絶好のバロメーターでもある」と論じたのは『ヴァージニア覚書』（一七八五）の著者であったし、大地を耕す者を美德の共和国を支える「神の選民」と名付けたのもまたジェファソンであった。『バーニング・デイライト』の結末には、第三代大統領以来の共和国のヴィジョンが導き入れられている、と言い切つてよいだろう。

だが、この結末に描き込まれた牧歌的風景をそのまま素直に受け止めていいのだろうか、という疑問を抱く読者も多いにちがいない。二十世紀アメリカの都市的現実には背を向けて、その混沌と腐敗をいとも簡単に否定することなど、果たして可能なのだろうか、と。すでに触れたように、この小説では都市的フロンティアと女性のセクシュアリティとが分かち難く結び付いていたが、デイド・メイソンと恋に落ちたハーニツシュは「セックスの深淵」を覗き込むことができるようになり、「月の谷」で暮らす二人を語り手が「釣り合いの取れたカップル」と形容していることから分かるように、「ビジネスという病氣」とともに「恋愛の黴菌」もまた、この幸福の谷からは完全に閉め出されている。あるいは、この谷間の一本の糸杉のそばに、遠乗りに出掛けた主人公が偶然、二人の子供の墓を見つけた場が用意されている一方、妻のデイドがせつせと縫っている「小さな衣類」によって彼女の妊娠が暗示されているにもかかわらず、こうした死や出産に関わる事実には、『バーニング・デイライト』の結末では何の意味も付与され



ていない。さらに、地滑りの結果、主人公の所有する土地にトン当たり五万ドル相当の豊かな金鉱脈が見つかったとき、彼はそれを大急ぎで埋めもどしてしまいが、この彼の行動が金銭という世俗的な価値を聖なるアルカディアの空間から排除することを意図していたことは、あらためて指摘するまでもないだろう。

したがって、エラム・ハーニツシュが築き上げた「月の谷」の牧歌的世界は、現実世界の混沌や無秩序や不合理を一方的に切り捨てた所に成り立っている。ここでは複雑な日常性の侵入を食い止めることによって、幸福の追求というファンタジーに耽ることが可能であるとしても、「ビジネスという病気」や「恋愛の黴菌」といった都市空間のシンボルを無視するジャック・ロンドンの姿勢から、『バーニング・デイルイト』の読者の多くはレオ・マークスのいわゆる「センチメンタル・パストラリズム」を連想するにちがいない。自然に帰ることによって「鋼鉄の筋肉」を取り戻し、年に一度の誕生日を「昔風のフロンティア的なやり方」で村人ともに祝うようになった主人公が、赤々と燃える夕映えの「月の谷」をデйдаとともに見やりながら、しみじみと幸福に浸っている、などといった『バーニング・デイルイト』の幕切れの場面は、どうしてももうもなくセンチメンタルであると言わざるを得ない。だが、このノスタルジアに溢れた場面は、レオ・マークスの言葉を借りれば、「かつて支配的であったアメリカは清く汚れなき共和国であり、森と村と農家から成り、幸福の追求に専念できるような静かな国であるというイメージ」<sup>⑧</sup>が自然主義作家ジャック・ロンドンのなかに根強く残っていることを物語っている。そこに美德の共和国の基盤としての地理的フロンティアを失ったアメリカ大衆の危機意識を読み取ることもできるだろうが、そう断定してしまう前に、それから三年後の一九一三年に出版された『月の谷』<sup>⑨</sup>という作品を考えておきたい。

この小説は、その題名からも察せられるように、都会を逃れた一組の男女が長い遍歴の末に「月の谷」に安住の地を見出すという物語で、『バーニング・デイルイト』の姉妹編と見做すことができる。ジャック・ロンドンが「牧歌的な夢」に強く魅せられていて、「土地への回帰のなかに肉体的、精神的再生の可能性を見て取っていた」と主張す

る批評家は、そこに『バーニング・デイルイト』と『月の谷』に共通の「中心的主題」を求めている。他方、別の批評家は前者が「富裕の弊害」を探っているのに対して後者は「貧困の弊害」を扱っている、と指摘しているが<sup>四〇</sup>、この場合、それぞれに「都会における」という但し書きを付けたほうがより正確であるかもしれない。いずれにしても、二冊の小説がともに最終的に都市から田舎へ、文明から自然への脱出という基本的パターンを共有していることは容易に理解できるだろう。

『月の谷』の第一部は逞しい連番御者（チームスター）でパートタイムの懸賞拳闘選手でもあるピリー・ロバーツとクリーニング工場で働く女工のサクソン・ブラウンとの出会いから結婚までを描いているが、ブラインドデートで知り合った二人が意気投合して急速に親しくなっていく行つた要因の一つは、ともにフロンティアを開拓したアングロサクソン系のパイオニアの血を引いているという点であった。最初のデートの場で、お互いの先祖が先住民たちと戦いながら幌馬車で大草原を越えてロッキーマウンテンの西側までたどり着いた開拓者たちであったことを知ったとき、サクソンは「私たちは二人とも古いアメリカ人の血筋だわ」とピリーに向かって呟いているが、その彼女の名前がサクソンであるという設定は、彼女自身が「アングロサクソン種族の華」で、「例外的に小さくて形のいい手と足と骨、それに優雅な肉体と身のこなし」という点で希有の存在」であったことを物語っている。子供の頃から「土地に飢えたアングロサクソンの大集団移住」の話聞いて育った彼女は「その伝統と事実」を糧にして成長した、と語り手が述べていることを付け加えておこう<sup>四一</sup>。このパイオニアの末裔としてのピリーとサクソンがオークランド市の一隅に居を構えて結婚生活を始めた様子が、第二部で語られることになるという意味で、『月の谷』は地理的フロンティア以後のアメリカで、都市空間に居住することを余儀なくされたパイオニアの物語であると言つてよい。

だが、当然予測されるように、地理的フロンティアに代わる都市的フロンティアは幸福を追求できる場所ではなかった。新婚気分を味わう暇もなく、二人の身の上につきつぎと不幸な事件が降りかかってくる。ピリーはゼネストの

あおりを食らって失業する上に、暴力沙汰の罪を問われて投獄され、ストライキ騒ぎに巻き込まれたサクソンは流産をしてしまうなど、二人は家庭崩壊の危機に直面する。夫と妻との間に透き間風が吹き始め、心の触れ合いを感じる事ができなくなる。「ほとんど赤の他人が彼女と住むようになったようだった。我知らず彼を避けている自分自身に彼女は気づいた」と書かれているだけでなく、彼女のほうも「自分を失ったような、自分自身に対して他人になつたような奇妙な気持ちを抱いたし、彼女の行動している世界が漠然とした、経帷子を着せられた世界のようだった」と語り手は説明している。自己疎外の状態に投げ込まれたサクソンは、夢遊病者のように町を彷徨い始めるようになるが、人生は「無意味で、悪夢のようになつた。不合理なことが何でも可能だつた。彼女を何だか分からない破滅的な結末へと追いやつている混沌とした事態の流れのなかには安定したものは全くなかつた」という彼女の感慨に、フロンティアの消滅という一八九〇年の危機を経験したアメリカ大衆の絶望感を読み取ることができるだろう。

こうしたビリーとサクソンの置かれた状況は、『バーニング・デイト』におけるエラム・ハーニッシュのそれを思い出させるが、この『月の谷』でもまた、二人の男女は、ハーニッシュと同じように、混乱と悪夢の都市空間から脱出することを決意する。「理性を失つた獣」になつて牢獄につながれたビリーと別れて、孤独と失意の日々を送つていたサクソンは、ある日、太陽の輝く青い空を眺め、潮風に吹かれているうちに、「自然の世界はすべて正しく、思慮があつて、情け深い。間違つていて、狂つていて、おぞましいのは、人間の世界だ」という結論に達する。

「彼女とビリーがこの人間の造つた世界の悲惨と悲嘆の無意味な渦のなかに呑み込まれている」とすれば、二人に残されているのは「人間の造つた世界の罨」から逃げ出すことだけだつた。「都市は彼女とビリーのための場所でもなければ、愛情や赤ん坊のための場所でもなかつた」とも書かれている。したがつて、この作品の第三部では、かつての西部のパイオニアたちが、そして『バーニング・デイト』の主人公がそうであつたように、「約束の土地」を求めて旅だつたビリーとサクソンが三年間もの流浪生活の果てに、ようやく「月の谷」という安住の地を見出すまで

の経緯が二百ページ以上に亙って延々と書き継がれることになるが、その一部始終をここで詳しく説明するまでもあるまい。この小説の結末に用意された極めて牧歌的な風景のなかで、ピリーとサクソン（彼女はピリーに受胎を告知したばかりである）が寄り添ったまま、木の間にたたずむ二頭の男鹿と牝鹿を見やっている、『バーニング・デイト』の結末に酷似した場面を指摘するだけで十分だろう。

この小説の展開について、ジェイムズ・ランドクイストはピリーとサクソンが「科学的な農民となって、先祖のバ イオニアたちが果たせなかった『カリフォルニアの夢』を実現する」<sup>(12)</sup>と説明している。たしかに、都会の片隅で暮らしていたサクソンは「彼女の一族の者たちが都市に住んだり労働組合や雇用者協会などに煩わされることのないアルカディアの日々」を夢見たことがあったし、「老人たちの語る自給自足の物語」を思い出したこともあったが、二十世紀のアメリカ社会で「自給自足」の可能な「アルカディアの日々」を「月の谷」で実現するというのは、センチメンタルとしか言いようがないではないか。『月の谷』におけるロンドンには「大地への回帰を、農民か牧場主のシンプルな生活への回帰を信奉していた」と考えるある論者も、「ある意味では、彼自身の初期の荒野を扱った作品よりもジーン・ストラットン・ポーターの小説に似通っている」<sup>(13)</sup>と指摘しているが、そこに表明されている楽観主義は、『月の谷』と同じ年に出版されてベストセラーになった、もう一人のポーター、つまりエリナ・H・ポーターの『ポリアナ』（一九一三）のそれを思い出させるかもしれない<sup>(14)</sup>。いや、二人が都市から脱出する直接の切っ掛けになったのが、ピリーの出所祝いの折りに観た、中西部あたりの農場を舞台にした活動写真であった、という設定そのものが、『月の谷』のメロドラマ性を際立たせているのではないか。スクリーンに映った畑や丘や空を眺めて、すっきり感激したサクソンが嬉し涙を流しながら、「オーケランドを出てから何処へ行けばいいか分かったわ」と叫び、「俺も昔から田舎に憧れていたんだ」とピリーが答えているのである。

たしかに、『バーニング・デイト』と『月の谷』におけるジャック・ロンドンは、混沌と腐敗に満ちた都市空

間のなかにパイオニア的資質を備えた主人公たちを投げ込み、彼らが肉体的にも精神的にも崩壊して行く姿を描き上げることによって、例外としての共和国の精神が新しい都市的、産業的風景のなかでも存続可能である、などといった革新主義的幻想を見事に打ち砕いている。そこに彼の自然主義作家としての姿勢が窺われることは認めなければならぬが、同時にまた、いずれの作品の場合にも、およそ自然主義作家らしからぬセンチメンタルな結末を臆面もなく持ち込んでいることもまた否定できないだろう。またしても「何故リアリズム小説はそれほどまでにリアリスティックでない形で終わるように思われるのだろうか」というエイミー・キャプランの嘆き胸を繰り返したくなるのだが、読者としては、牧歌的な風景を手放しで礼讃するロンドンの時代錯誤的なセンチメンタリズムを批判する前に、大地や農民に対する彼の信頼がジェファソン以来の古典的共和主義の美徳の伝統と深く関わっているという事実が目しなればならない。ロンドンの登場人物たちを「月の谷」へと誘い続けたのは、地理的フロンティアの消滅した後のアメリカ社会においてもなお命脈をつないでいる共和国のヴィジョンに他ならなかったのである。

註

- (1) 拙稿「リアリズム小説のセンチメンタルな結末——ハロルド・フレデリックとシンクレア・ルイス」『人文論究』第四十八卷第二号（一九九八年九月）一〇二—一六頁。
- (2) Jack London, *Burning Daylight*. Vol. 15 of *The Works of Jack London* (Tokyo: Hon-no-tomoshia, 1989).
- (3) Earle Labor, *Jack London* (New York: Twayne, 1974) 139.
- (4) Earle Labor and Jeanne Campbell Reesman, *Jack London*. Rev. ed. (New York: Twayne, 1994) 98-99.
- (5) Hanna Fenichel Pitkin, *Fortune is a Woman: Gender and Politics in the Thought of Niccolò Machiavelli* (Berkeley: U of California P, 1984) 109-69.
- (6) 拙著『アメリカ自然主義文学論』（研究社出版、一九七三年）五三—七二頁、一三四—五二頁を参照。
- (7) Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia. Writings*, ed. Merrill D. Peterson (New York: Library of America,

- 1984) 290-91. 引用は中屋健一訳による。
- (8) Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (New York: Oxford UP, 1964) 6. 引用は榊原胖夫、明石紀雄訳による。
- (9) Jack London, *The Valley of the Moon*. Vol. 20 of *The Works of Jack London* (Tokyo: Hon-no-tomasha, 1989).
- (10) Labor and Reesman 98; Peter J. Schmitt, *Back to Nature: The Arcadian Myth in Urban America* (New York: Oxford UP, 1969) 136.
- (11) 下に窺われるアンチロサクソン中心主義は Josiah Strong, *Our Country* (1885) における「アンチロサクソン化」と密接に関わっていると考えられる。この点については拙稿「共和国のヴィジョンと『アンチロサクソン化』——世紀転換期アメリカの大衆文化をめぐって」『英文學春秋』第六号（一九九九年十月）四一—八頁を参照。
- (12) James Lundquist, *Jack London: Adventures, Ideas, and Friction* (New York: Unger, 1987) 63-64.
- (13) David M. Wrobel, *The End of American Exceptionalism: Frontier Anxiety from the Old West to the New Deal* (Lawrence: UP of Kansas, 1993) 90. なお、ジーン・ストラットマン、ポーターや K・D・ウィギンの「幸福小説」については拙著『アメリカ自然主義文学論』五五—五七頁を参照。
- (14) 『ポリアナ』については拙論『ポリアナ』亀井俊介編著『アメリカン・ベストラー小説38』（丸善ライブラリー、一九九二年）一〇四—一〇九頁を参照。
- (15) Amy Kaplan, *The Social Construction of American Realism* (Chicago: U of Chicago P, 1988) 159.

——文学部教授——